座談会

公益財団法人 運動器の健康・日本協会　創立 20 周年記念

今までも、そしてこれからも 人間の原動力である運動器の 健康のために

「骨と関節の 10 年」日本委員会として発足してから 20 年。運動器という言葉の定着、運動器が健全であることの重要性、運動器疾患・障害の早期発見と予防体制の確立を柱に活動してきました。現在は公益財団法人となり、社会的責任を全うしながら、今後いかに活動を発展させていくかについて座談会を行いました。

座談会メンバー

理 事 長　丸毛　啓史（東京慈恵会医科大学 特命教授、学校法人慈恵大学 理事）
専務理事　松下　　隆（福島県立医科大学 外傷学講座 特任教授、新百合ヶ丘総合病院 外傷再建センター センター長）
理　　事　三上　容司（独立行政法人 労働者健康安全機構 横浜労災病院 院長）
理　　事　竹下　克志（自治医科大学整形外科 教授）
理　　事　田和　一浩（一般社団法人 全日本野球協会 評議員）
理　　事　吉井　智晴（東京医療学院大学保健医療学部リハビリテーション学科 教授、公益社団法人 日本理学療法士協会 副会長）
理　　事　岡田　真平（公益財団法人 身体教育医学研究所 所長）
事務局長　田名部　和裕（公益財団法人 日本高等学校野球連盟 顧問）
司会／理事　武藤　芳照（東京大学 名誉教授、一般社団法人 東京健康リハビリテーション総合研究所 所長）

文・棟石理実　写真・中村香奈子

座談会の目的と役員として参加に至る経緯

武藤　座談会を始めるにあたり、まずは理事長からひと言お願いします。

丸毛　創立して20年、その間の地道な活動により、国策の中に「運動器」が採用され、学校健診に運動器検診が導入されました。今日は今後の10年の方向性などについて、皆さんからご意見をいただきたいと思います。

武藤　では座談会の目的について、広報担当の竹下理事、お願いします。

竹下　はい。20年も経ちますと創立者の熱い思いやさまざまな変遷をご存じない役員が徐々に増えております。そこで、20周年記念誌に座談会の内容を掲載することでその経緯をお知らせし、さらには今後進むべき方向性について、20周年記念誌に残したいというのが主な目的です。

武藤　ありがとうございます。まずは「骨と関節の10年」日本委員会から始まったあたりを振り返っていかがでしょうか。

松下　発足当初は、各学会から推薦を受けた人が一人ずつ「骨と関節の10年」日本委員会に入るという感じでした。ちなみに私は、日本骨折治療学会の代表として入りました。初めの頃は、組織も整っておらず会議が長かったのを覚えています（笑）。活動が進むにつれて、法人化をしたほうがいいんじゃないかという話になって……。

武藤　社会に認知されて、公的な仕事をするために法人格が必要だということでしたね。

松下　はい。また、世界運動のほうが2010年あたりを境にちょっと弱体化した感じになって、それで各国自身が独自にきちんと活動するためにも、法人格をということだったように思います。その手続きを担当したのが田名部さんです。

田名部　最初の一般財団法人への変更は、僕は高野連（公益財団法人 日本高等学校野球連盟）の事務局で慣れていましたので、特に問題なく準備はできたんですが、次の公益財団法人への移行が大変でした。ここは収益事業がなかったのでまだよかったんですが、国としてもいい加減な法人を作りたくないので審査が厳しいんですよ。特に、「収支相償」という概念が実にやっかいなんですね。

丸毛 啓史　理事長

2019年2月より理事長に就任
東京慈恵会医科大学 特命教授　学校法人慈恵大学 理事

吉井　公益財団法人は、利益が出ても公益事業のために使う必要があるということですか？

田名部　はい。それ以外にもいろいろあって、六本木にある内閣府に何度か通いました。書類の素案は望月弁護士や専門の先生方に作っていただきましたが、たくさんの資料を担当の方が実に親切、丁寧に見てくださいました。230ヵ所も訂正箇所がありました。驚いたのが、これらの手続きが一切無料だったことです。担当の方から、「その代わり、税金を投入してあなたの団体を支援するんです。それをよく認識してください」と言われ、感激しましたね。

武藤　高野連で長年事務局長を務められた田名部さんのキャリアの賜物ですね。ところで、田名部さんはどういう経緯でこの協会に関わるようになったのでしょうか。続いて、他の皆さんもお願いします。

田名部　高野連の事務局を定年退職した時にお誘いを受けました。2010年の秋頃です。最初は、英語とカタカナの専門用語が飛び交って会議の内容がさっぱり分からない。メモも取れませんでした（笑）。

吉井　私がこの協会を知ったのは、2014年の日本賞に応募した時で、奨励賞をいただきました。その時は何もなく終わりました。お声がかかったのは2017年です。私が所属する日本理学療法士協会からここに参加する代表理事が植松（光俊）から大工谷（新一）に変わった時に、もう1名、女性枠があるというお話でした。

武藤　日本理学療法士協会は会員が約13万人と巨大組織なので、複数名の代表を、せっかくだから女性を推薦してくださいとお願いしたので、女性枠は誤解ですが、とにかく来ていただいてよかったです。

吉井　ありがとうございます。初めて出席した理事会は女性は私一人で、しかも周りは病院長さんや理事長さんといった偉い方ばかりで“しまった”という感じでした（笑）。でも、女性への門戸を開いていただいたのは、ここ10年の歴史の中で貴重な出来事だなと思います。

岡田　私は武藤先生が東大の恩師という関係もありますが、印象深いのが松下先生も関わられた『マンガ 運動器のおはなし 大人も知らないからだの本』の制作（2005年）です。私の後輩の鎌田真光君を中心に東大の学生たちがとても魅力的な冊子を作り、それが運動器の活動を認識したきっかけです。

田和　私は田名部さんと、お互い東京六大学野球のマネジャーをしていたご縁から、お声をかけていただきました。最初、運動器の名前は、英語はおろか、日本語でも知りませんでした。60過ぎてから新しいことを覚えるのは大変でしたが、皆さんのおかげで勉強させていただきました。

武藤　田和さんは元商社勤務で海外赴任も長かったので、最年長でありながら堪能な英語を生かして国際関係を担当していただいています。

竹下　私は星野雄一理事の後任という形で呼んでいただきました。発足当初は、整形外科医の私から見ると、非常にステータスの高い委員会で、特に黒川高秀先生が中心でいらっしゃったので、緊張感をもって総会に出席したのを覚えています。

吉井 智晴　理事

東京医療学院大学保健医療学部リハビリテーション学科教授、公益社団法人 日本理学療法士協会 副会長

三大目標の達成状況と目標を取り巻く環境

武藤　次の議題に移ります。

- 「運動器」という言葉の定着
- 運動器が健全であることの重要性の啓発
- 運動器疾患・障害の早期発見と予防体制の確立

この三大目標が杉岡洋一委員長時代に決められました。この達成状況について、三上理事、いかがですか。

三上　毎年、「ロコモティブシンドローム」認知度調査を実施していますが、その中に言葉の調査があります。その結果を見ると「呼吸器」や「消化器」という言葉はほぼ90％以上の認知なんですが、「運動器」は50％くらいです。病院などでの診療科目として名前があると、一般の方々には定着しやすいのかなという印象です。

竹下　循環器など、今は診療科目にありますが、おそらく20年ほど前は一般の方もご存じなかったと思うんです。やはり、言葉は多くの方に使っていただかないと認知度は上がりません。実は今、看護系、医学系の教育の中で運動器に関する授業があり、「運動器」という言葉は広まっています。ですから、医療系の若い世代には、運動器と聞くとすぐにイメージできる人が徐々に増えてきました。

吉井　そうなんです。リハビリテーションの分野でも、

「運動器」は日常的に使われています。最近の教科書のタイトルを見ても、「運動器」という言葉が確実に増えているし、また理学療法士の学会などでも、「運動器の理学療法」という形で使われています。学校の健診でも運動器検診という言葉が使われていますから、徐々に定着するのではないでしょうか。

竹下　ただ、整形外科という名称のほうが歴史があり、馴染みのある方も多くいらっしゃいますので、診療科目も一気に名称を変えるのではなく、「整形外科・運動器科」などと併用する方法をとって徐々に広めていって、学問の分野でも運動器という言葉が日常化すれば、一般の方への認知も上がるように思います。

丸毛　整形外科という言葉は、小児の変形を矯正するという意味で、1741年にニコラス・アンドリーが世界で最初に使ったと記憶しています。日整会のシンボルマークにもなっていますね。今もお話に出たように整形外科という名称に思い入れがある方もたくさんいらっしゃる。一方で、診療科目に運動器科があれば一般の方々に覚えていただきやすいというのも事実です。竹下先生がおっしゃるように、まずは名称の併用が一つの案なのかなと思います。

武藤　学校健診での運動器検診については、ひとまず目標を達成しましたし、中央教育審議会の改変の時に、「運動器疾患・障害は」という文言を脚注で入れてもらいました。中教審で入れると、全国の学校関係にその文言は流布していきます。

岡田　私は仕事柄、自治体に関わることが多く、医療費分析をすることがあり、そこで「筋骨格系」という言葉が出てくるんですが、その表現を「運動器」という言葉に置き換えることができるかもしれない、と思いながら聞いていました。

三上 容司　理事

独立行政法人 労働者健康安全機構 横浜労災病院 院長

世界運動と日本が目指すべき活動

武藤　次に、世界会議に参加された方、それから国際広報ご担当の田和理事、何かありますか。

松下　冒頭でも言いましたが、最初の10年までは、世界会議は統一が取れていて、各国が同じ目標を持って活動していました。世界会議に出席すると、日本も頑張らなくちゃいけないと思ったものです。

田和　一番最近では、松下専務理事はカナダの世界会議に行かれましたね。

松下　はい。でも学会の中の一つのセッションみたいな感じで、2～3の国が活動を発表して終わりでした。

田和　総会っていう感じじゃなかったんですね。昔、スウェーデンが中心の時は、きちんと活動していたような気がしますが、今は本当にどこが何をやっているのか分からない状況です。少なくともEUは先生同士の個人の関係で密接に連絡を取り合っていて、その内容はわれわれにはよく分かりません。アメリカも独自で活動しているし、アジアも日本以外は何をしているのか分からないのが現状です。国際会議のウェブサイトがありますが、そこへの投稿もありません。私はときどき確認して理事会の報告や日本賞の発表がある時などは、概要を投稿しています。

三上　私が参加したのは、2015年で、オスロでした。その時はWHOからも担当官が出席して話をしたりして、充実した2日間でした。日本も、e-Posterを会場に貼り出したりして、手前味噌ですが評価されていたと思います。その後、活動が低迷していったように思います。

松下　さっき岡田さんが言ったマンガを発表した年はものすごくよかった。賞をもらったんですよね。

岡田　はい、すごく評価されました。

松下　そうそう、とても印象に残っています。僕も日本の活動報告の原稿を一所懸命作り発表しました（笑）。

岡田　私は三上先生の2年前に、内尾祐司先生と二人でリオデジャネイロへ行かせていただきました。16ヵ国25名の参加で、とてもアットホームな感じでしたが、熱い議論がありよい会だな、今後盛り上がっていくのかなという印象を持ちました。あとは、ただ遠かったなあ、と（笑）。

竹下　私は3年前で、上海でした。半日くらいの日程で、活動力が落ちたなと感じました。今後は世界に付いていくのではなく、日本ではこういうことをしていますよ、どうですかとアピールを続けてはどうでしょうか。特に、高齢者の運動器の健康に対する取り組みやスポーツ系における独自の取り組みなど、日本が海外に発信するトリガーになることも大事なことかなと思います。

武藤　国際広報について、他に何かありますか。

田和　はい。先ほど申し上げた国際会議のサイトですが、今年の2月が最後でサイトそのものが更新されていないように思います。アイテム自体は10くらいありますが、他の国の内容は個人の学術発表的なものが多く、日本のように組織としての活動報告はほとんどなかったように思います。今後も、日本の活動内容を積極的発信していきます。

今後の組織運営についての望ましい形態

武藤　では、組織の構成と今後の組織運営についてお話を伺いたいと思います。

田和 一浩　理事

一般社団法人 全日本野球協会 評議員

松下　参加協力会員、つまりスポーツ団体の方々にもう少し積極的に参加いただけるような交流が必要ではないでしょうか。また、賛助会員や特別賛助会員の皆さんからの資金面でのご協力には本当に感謝しかありません。これからも、こちらからこういう活動を企画しますので協力をお願いしますと提案をしていけたらと思います。

武藤　社会貢献活動であっても、賛助会員や特別賛助会員である各企業は、社内稟議を通さなくてはいけません。そのためには、公益財団法人として次年度こういう事業をやりたいので協力をお願いしますという企画を提案して、社内調整をするための時間も考慮して進める必要があるでしょうね。

三上　私が気になっているのが、特別賛助や賛助の会員に製薬メーカーが多いということです。少し裾野を広げる必要があるのではないかと思います。その中で医療機器メーカーのジンマーバイオメット合同会社に入っていただいたのはよかったです。

武藤　ジンマーバイオメット合同会社は丸毛理事長のご尽力です。お誘いのコツか何かありますか（笑）。

丸毛　いや、特にありません（笑）。今まで医療機器メーカーが入ってなかったし、また資金的にも安定している企業なので、趣旨さえしっかりとしていればご理解いた

松下 隆　専務理事

福島県立医科大学 外傷学講座 特任教授、新百合ヶ丘総合病院 外傷再建センター センター長

岡田 真平　理事

公益財団法人 身体教育医学研究所 所長

竹下 克志　理事

自治医科大学整形外科 教授

田名部 和裕　事務局長

公益財団法人 日本高等学校野球連盟 顧問

だけると思ってお願いしたら、よいお返事をいただけました。やはり、活動に賛同して入っていただくというのが重要かと思います。

岡田　先ほど、スポーツ団体の話がありましたが、スポーツ系の学会、つまり日本体力医学会とか日本体育・スポーツ・健康学会とか、そういう学会に働きかけるのも必要かなと思っています。

竹下　運動器の健康維持のためにも、栄養や食事に関連する企業や団体でもよいと思います。例えば、運動器の健康のために必要な食事とか、高齢者の口腔ケアとかに関連した団体に、まずは『Moving』* などをご提供して、興味を持っていただくことから始めてはいかがでしょうか。

武藤　栄養をテーマにしたオンライン・シンポジウムなどを企画して、まずは協賛で入ってもらって実績を作る方法もありますね。では次に、理事・監事、評議員、委員会について、あるいは事務局体制、組織体制に関して何かご発言があればお願いします。

松下　もっと女性に参加してもらいたいんですが、どうすればいいんでしょうね。

吉井　制度や割合を決めていただくと確実ですが、ただ、先ほど誤解の話として出た女性枠を作ってしまうと、適任の候補者がいない場合でも、無理に選ぶという弊害が出てくるという難しさもあります。

武藤　当面は、常に女性を増やす意識を持って活動していきましょう。では三上先生、財務についてはいかがでしょうか。

三上　全体的に事業費以外の経費が多いのが気になります。もう一つ気になるのが、先ほど田名部さんが言われた収支相償です。自由な予算組みができない上に、今後、収益が減ることも頭に入れておく必要があります。そうすると会費の値上げを視野に入れなくてはいけません。そこで、クラウドファンディングはどうかと思っています。賛助会員の裾野を広げるきっかけにもなるし、運動器という言葉を定着させる方向にも働くんじゃないでしょうか。

岡田　この協会は一般個人の寄付を積極的に受け付けている印象があまりありません。意外とこの活動を応援したいなと思ってくださる方って、いらっしゃるような気がするんです。もう少し寄付制度を充実させてもいいのではないでしょうか。

田名部　一般の方からの寄付は、手続きさえすれば受けられます。あと、クラウドファンディングですが、15%も手数料を取られるのでどうかなと思いますが……。

武藤　先週聞いた話では、手数料が10%の会社も出てきているようです。一方で、公益財団法人にふさわしい収入の在り方を考えた時、むしろ寄付のほうがいいのかもしれません。

吉井　何か収益事業をすることは可能なんですか。

田名部　うちの協会は今、収益事業を財団設立の際の申請要件に入れていないんです。ですから、例えばスクールトレーナー養成事業をするとなると申請が必要になります。

岡田　個人的な考えですが、オンライン・シンポジウムや、スクールトレーナー養成講座の参加費は、イコール収益事業にはならないんじゃないかな、と。参加費を集めて得た資金を公益財団法人運営のために使うのであれば、申請は必要ないのではないかと思うのですがいかがでしょうか。

田名部　またいろいろ研究してみます。

核となる三大事業
歴史ある日本賞と未来へつなぐ舞台医学

武藤　では当協会の三大事業です。

1　顕彰事業
2　広報事業
3　運動器の健康推進事業

の中で、日本賞は一番重要な活動です。理事長は、日本賞にどんな感想と印象をお持ちでしょうか。

丸毛　私がこの協会に関わるようになって、最初に見たのが日本賞の発表です。公益財団法人らしい素晴らしい取り組みだなと、感激しました。しかも全国的な広がりがあり、応募してくる皆さんも実にいろいろな活動をしていらっしゃる。今後、形は変わるかもしれませんが、続けていくべき事業だと思っています。

岡田　日本賞という事業は公益財団法人の軸となるよい活動だと改めて感じています。同時に、地道に良い活動をしている所がたくさんあるので、多くの方に手を上げていただきたいですね。評価されると、運動器の健康に対する意識も高まるはずです。

武藤　できる限り、広報に力を入れ周知させていきたいと思います。広報担当の竹下理事、どうですか。

竹下　先ほども触れましたが、新たな路線として、骨×カルシウム、骨×食事といった、栄養などの今までとは違う視点は大事かなと思っています。

武藤　実は、新しい事業の動きとして舞台医学について徐々に進めていますが、『Moving』巻頭ページ制作のために吉田都監督（新国立劇場・舞踊芸術監督／バレリーナ）と対談をされた竹下理事、いかがでしたか。

竹下　実に楽しい時間でした（笑）。実感したのは、舞台で活躍されている方々の多くは、スポーツと極めて類似性の高い身体活動をされているのに、舞台医学という

分野はスポーツ医学に比べて数十年遅れているということ。問題意識すらありません。その点、スポーツはこの数十年でスポーツ整形外科、スポーツ医学という考え方のもとに運動学、予防医学、トレーナーなど、かなり制度化が進みました。吉田監督も古い教育パターンがいまだに残っているとおっしゃっていましたが、舞台に立つ人たちが不利益を被らないためにも、後継者育成のためにも、舞台医学にわれわれが強く関与していくことが、整形外科学会にとっても、運動器科学会にとっても非常に重要です。海外の舞台医学研究があれば、それも参考にしながら進めたいと思います。

丸毛　舞台医学は、ある意味スポーツ医学そのものです。にもかかわらず、現状の舞台医学は、依然としてスポーツ医学の足元にも及びません。舞台に立つ人が正しい認識をもって安心してパフォーマンスができ、何かあった時には適切に治療が受けられるようにするためにも、舞台医学の近代化を急いで整える必要があります。スポーツ医学に長年関わってきた武藤先生のような方が先頭に立って活動すれば、舞台医学も発展していくのではないでしょうか。また、そこに当協会が関わっていけばウイングが広がるし、社会の当協会を見る目が大きく変わってきます。舞台医学はこの10年で、ぜひ取り組むべき大きな課題です。また、スポーツ医学の関係から言うと、今まで当協会は野球に軸足に置いてきましたが、他の競技にウイングを広げていく必要があるでしょうね。

武藤　“ウイングを広げる”というのは良い表現ですね。例えば、『Moving』の巻頭ページに、もっと野球以外のスポーツ関係者に登場していただくのはよいかもしれませんね。それを機に当協会へ参加していただける可能性が広がる。場合によっては役員、理事、評議員になっていただけるきっかけになるかもしれません。

丸毛　ただ、ウイングを広げ過ぎますと予算やマンパワーの問題も出てきます。バランスを考えながら少しずつ広げていけばいいんじゃないでしょうか。

武藤　杉岡洋一先生が「脳を思考・命令系と考えれば、運動器はその表現系である」と言われたことから考えても、運動器における舞台医学は重要です。また、2012年度から中学校では男女ともにダンスが必修科目になったことで、今後、中学生の運動器のケガ・故障などが増えると推測されますので、舞台医学の重要性は高まるはずです。

運動器の健康・日本協会
創立30周年に向けての活動

武藤　では最後の議題、当会の将来展望についてです。公益財団法人である以上、社会的立場に立って事業展開をし、かつ運動器という名称を中核にしてさまざまな分野の方が一緒に手を取って進めていくことが求められていますが、当協会のこれからについてお話いただいて、締めたいと思います。

岡田　改めて『Moving』の表紙と巻頭ページを見ると、単に有名人というわけではなく、いろいろな分野で活躍されていて、しかも運動器と関わりがある人ばかりです。運動器をキーワードにこれだけの方に登場していただけることが、運動器の健康・日本協会にとっての強みなので、この流れを今後いかに発展させるかを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。また、先ほどから出てますが、当協会へのスポーツ団体の参加は不十分です。これからの10年、なるべくスポーツ関係者、健康関係者に活動を広げていく役割を担いたいと思っています。

武藤　巻頭ページに掲載された方々が登場していただけることになった経緯のようなものを、組織内で伝承していく必要があるかもしれませんね。

吉井　私は二つ思うことがあります。一つは安定収入の確立、もう一つは日本賞で受賞した方たちの、受賞後の活動支援というか、一緒に活動する企画を検討して継続的なつながりを持つことです。収入については、研修などを実施して当会自身が収益を上げる方法を少しずつ始めてもよいのかなと……。また受賞者との継続的なつながりは、運動器に何かしらの支障のある人たちの自立を促すかもしれません。そうなれば、この組織に関わる人も増えるのではないでしょうか。

田和　やはり、一番は野球以外のスポーツ競技団体、バスケ、サッカーなどとつながることが重要かと思います。また国際関係では、近年の新型コロナウイルスの流行で、他国と連絡を取りにくくなっているので、これが収まるのを待つしかありませんが、ネットなどを通じてわれわれが20年活動してきたことに関心を持っていただけるように情報を発信していきます。

竹下　今後のヒントになるのが、コロナ禍で実施したオンライン・シンポジウムへの反響の大きさです。例えば、事前にオンラインで基本的なことはマスターしていただくと、その後の対面講習会は短時間で済み、予算の適正化も可能です。今後10年、こういう視点が求められるのかなと思っています。

三上　10年後には、運動器という言葉が消化器、循環器のように世の中の人の認知度が80％くらいになるように、協会として取り組んでいきたいですね。今は、世の中の変化の幅が大きく速度も速くなっていますから、われわれとしては出遅れないように活動を進める必要があると思います。

竹下　運動器の健康・日本協会に参加するようになってから、運動器の健康を維持するためには整形外科医師の観点からだけではなく、より多様な視点からの対応が必要だと思うようになりました。特に、この協会はいろいろな職種の方が集まっています。医師間だけではなく、医学を越えたところで運動器の健康を重視して、より多様な視点から活動ができ、いろいろなメッセージが出せることが当会の最大の強みではないでしょうか。

松下　そのためにもやはり、スポーツ団体との関係を深めるのは大切ですね。そして、シンポジウムなども一般の人にまで対象を広げて多くの人たちとのつながりを増やすこともよいかもしれません。

武藤　では最後に、丸毛理事長お願いします。

丸毛　20年間、私たちは地道に基礎固めとなる活動をしてきました。これらを基盤にして、これからの10年は少しウイングを広げる方向で進み、それによって、運動器の健康・日本協会はもちろん、運動器という言葉への国民の皆さんの認知度を上げていきたいと思います。ただ、急激にウイングを広げ過ぎないで、現実的な目標を設定して一歩ずつ確実に進めていく。その第一歩が舞台医学です。また、うちの大学（東京慈恵会医科大学）はもともと運動と栄養学が柱なので、運動器と栄養学をリンクさせる分野へもウイングを広げるのもよいかなと個人的には思っています。

武藤　ウイングを動かして、気持ちを動かして、寄付へと動かす……ということで、本日はありがとうございました。

2021年7月8日（木）如水会館（東京都千代田区）にて

武藤 芳照　理事

東京大学 名誉教授、一般社団法人 東京健康リハビリテーション総合研究所 所長

＊『Moving』：運動器の健康・日本協会の広報季刊誌。Vol.1の藤本隆宏氏（俳優・元水泳選手）と河合純一氏（JPC会長・元パラ水泳選手）の対談からvol.40の山崎直子氏（宇宙飛行士）まで、各分野の前線で活躍する人が登場。